



幻境の碑

幻境の碑

ここ南多摩郡川口村字森下は明治の天才詩人北村透谷が、わが希望の故郷とよび、秋山國三郎翁を慕い、四度訪れし幻境の地なり

「わが幻境は彼あるによりて幻境なりしなり。世に知られず人に重んぜられざるも胸中に、萬里の風月を蓄へ、綽綽餘生を養ふ。この老侠骨に会はんとする我が得意は、いかばかりなりしぞ」(明治二十五透谷「三日幻境」より)

竜子 秋山國三郎は多摩の名望家中、屈指の文人なり。演芸、刀劍、俳諧の道に通じ、進取自由の思想を愛し、秋山文太郎、秋山林太郎、小谷田元一、齊藤虎太、乙津良作、小野内蔵太、大矢正夫らを薫陶してその志を伸ばしむ。義太夫の門人また百を下らず、その俠氣、高風敬慕する者甚だ多し。よって後進相集い、永く翁の人徳を顕彰せんとす。

昭和五十二年五月十五日

秋山國三郎顕彰会

撰文は色川大吉氏、揮毫は奥住忠一氏

◇散歩のみどころ

幻境の碑がある秋川街道の森下バス停から、川口川沿いに街道をジグザグと下り、神社仏閣を参拝しながら上榎木バス停迄の凡そ三kmの行程。「三日幻境」の紀行文を書いた自由民権家北村透谷の愛した上川町を散策し、その後大般若経、秋山国三郎が眠る圓福寺へ。都重要文化財薬師如来坐像が安置されている長楽寺、熊野神社へと歩く。そして、かつてこの地域に貢献してきた川口兵庫介館址、鳥栖観音で知られる長福寺、千人隊で名をなした原子剛、楠正重が眠る法蓮寺、さらに秋山国三郎家を見学。最後に大麦の一品種である裸麦の品質改良に力を尽くした篤農家の河井宗兵衛の碑と生家を見学。榎木バス停まで歩き、ここで解散。



【川口郷について】

八王子には、縄文時代の遺跡が多くみられる。ここ川口川流域も遺跡が多く発見され、古くから人々の生活が営まれていた。律令国家が誕生すると、八王子域は、武蔵国多磨郡に編成され、十の郷として掌握された。川口郷は、その一つで、十世紀に書かれた「倭名類聚抄(わみょうるいじゅうしよう)」に「川口郷」の名が記載されている。

その後、中世に入ると川口郷は、舟木田新庄とよばれる藤原氏の流れをくむ京都の一条家の荘園の一部となる。この荘園の管理を任されたのが川口氏(河口氏)である。川口氏は、武蔵七党のうち西党に属し、平安時代にこの土地に土着したといわれ、十一代川口兵庫介幸季(ゆきすえ)の代 応永年間(一三九四〜一四二七)に最も繁栄したといわれている。そのため、今も川口氏や兵庫介ゆかりの文化財が数多く残されて

いる。

また、明治時代には、自由民権や困民党といった、当時の薩長藩閥政治に対する反対運動が高揚した地域でもある。こうした連綿とつづいた地域の歴史が、今なおさまざまな文化財を通して確認できる貴重な地域である。

倭名類聚抄(倭名抄)は、源順(みなもと)のした(がう)が、承平年間(九三一〜九三八)に編纂したもので、今から千八十年余も前から「川口」の地名があったことが知れる。



川口川 (川中新橋付近)

●多摩の十郷

平安期、政治体制は律令制と呼ばれた時代で、行政組織は国―郡―郷と縦系列の大系が完備していた。律令国家は、全国を六十六ヶ国二島に分割し、国を郡に分け、郡を郷に細分化して、中央集権の地方行政をつくっていた。

武蔵国には二十一の郡が置かれ、その一つである多摩郡は、十郷に分けられていた。その十郷とは小川（あきる野市小川）・川口（八王子市上川町・川口町）・小楊（おやぎ）（国立市青柳）・小野・新田（にうた）（調布市布田）・小嶋（おしま）（調布市小島町）・海田（あまた）・石津・狛江（狛江市）・勢多（せた）（世田谷区瀬田）の十郷である。

（一）内は、ルビと郷の現在地と考えられている地名である。

●「川口郷」の地域

「川口郷」とは現在の川口地域と同一かというところではない。大日本地名辞典によると「川口郷」は旧八王子市の南までを含んでいると記されている。武蔵名勝図絵も川口村について「古は大邑にてありしなり。いまもこの地は狭からずといえど、古えに比すれば十が一なり」と書いている。縮小された理由は、有力武士団や荘園制の成立により地方行政組織が改変されたことによる。もとの川口郷は由井領や横山領に大きく塗り替えられ、川口の地名は中世には「北河口郷」「南河口郷」の名で残っていた。

現在の川口町は江戸初期には確定している。寛文七年（一六六七）の検地の時、川口村は上下に分割され上川口村、下川口村が成立し、その周囲に山入・犬目・檜原の各村が接していた。明治二十二年（一八八九）の町村合併でこれらの村落が合併し

て川口村を形成し、戦後の八王子市への合併まで存続した。

平安期の「源氏物語」より前に、故郷の大地に付けられた「川口」の地名は、生きた歴史資産として現在に継承されている。

①幻境之碑

上川町二九九一

昭和五十二年（一九七七）に建立された石碑は、表に「幻境 秋山國三郎 北村透谷親交の地」と刻まれ、裏に歴史家色川大吉氏の碑文が記されている。

北村透谷（明治元年～明治二十七年）は、自由民権期の明治時代半ばに親交のあった大矢正夫と上川口森下を訪れ、当地の文化人秋山國三郎を父のように慕った。後に「三日幻境」という紀行文に、ここが幻境の地であり、希望の故郷であると絶賛

し、その頃の國三郎との親交をま
めてゐる。秋山國三郎（文政十一年
（明治三十六年）については、撰文
に詳しく記されているが、文学と武
術に秀で、自由思想を愛していた人
で、多くの人たちから敬慕されてい
たという。研究者の一人小澤勝美氏
は、「中年になつて戻つた生まれ故郷
の川口村で、自由民権の運動の後ろ
盾として多くの青年たちを育て、村
にふみとどまり人間的な自由をつら
ぬき通した反体制的な常民（民衆）
像である」と國三郎を評している。

透谷は、國三郎によつて強力な薩
長藩閥政治に対する反体制の精神と
自由の力、そして人間的なエネルギー
を与えられたようだ。自らが立つ
べき心の故郷をこの川口村の森下に
求め、「ホープ（希望）の幻境（故郷）」
と呼んだ。

●秋山國三郎

文政十一年（一八二八）八月一日
から明治三十六年（一九〇三）十一
月二十五日、川口村在の民権家。弘
化二年（一八四五）頃より俳句を發
表（俳号龍子）。弘化三年（一八四六）
四月天然理心流免許皆伝を受け、後
に「ヤットーの爺」と呼ばれた。武
州上尾で義太夫修行、江戸で義太夫
語りとして寄席に出たといわれる。
嘉永六年（一八五三）川口村に帰り
家を継いだ。万延元年（一八六〇）
ころ再び放浪の末、明治初年帰村。
明治九年（一八七六）隠居した。義
太夫・音曲師・俳句等悠々自適の生
活を送った。

明治十七年（一八八四）頃、大矢
正夫・北村透谷と幻境生活を送った。
明治二十二年（一八八九）句集「安
久多草紙」発刊。明治二十五年（一
八九二）七月二十八から三十一日、
透谷と「三日幻境」を過ごした。

國三郎は、透谷のいわゆる「魚の

如し」民衆にあつてなお息づく「内
部生命」を秘めた「地底の大江」を
代表する者であり、透谷が「希望」
と呼びえたごく稀な心の故郷であつ
た。

●北村透谷

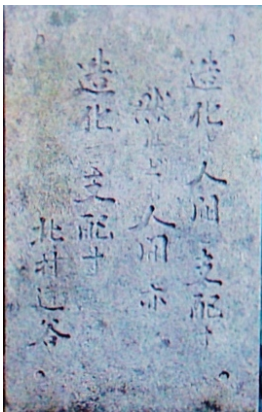
明治元年（一八六八）十一月十六日
小田原に生まれ、明治二十七年（一
八九四）五月十六日二十五歳で没。
詩人、評論家。本名は北村門太郎。
透谷というペンネームは、このとき
住んでいた数寄屋橋にちなんで透谷
（すきや）としゃれたものだという。

東京専門学校中退。自由民権運動か
らキリスト教に転じ受洗、明治二十
一年（一八八九）創立の日本平和会
に参加して絶対的平和主義の運動を
行なった。しかし彼の本質は革命的
ロマン主義であり、明治十七年（一
八八五）の大阪事件とのかかわりを

うたった「楚囚之詩」や、壮大な宇宙感覚に終末観、厭世観をこめた劇詩『蓬萊曲』、あるいは恋愛の純粹性を述べた評論『厭世詩家と女性』などで現実を変革するばねとしての「世界」への憧憬を示した。

また、明治期には近代的な文芸評論をおこない、島崎藤村らに大きな影響を与えた。

他にもう一つ北村透谷の碑が、みつい台二丁目の谷野西公園にある。「造化の碑」と呼ばれるこの碑は、昭和二十九年（一九五四）、透谷の没後六十年にあたり、ふだん記運動の提唱者、橋本義夫らによって、川口村（当時）に建立が計画されたもの。しかし、地元の調整がうまくいかず、結局、この碑は三年後の昭和三十三年に、中野町の山の上に建てられた。そして、その後の宅地開発に伴い、現在の場所に移されたもの。碑面には、透谷の「内部生命論」からの言葉が刻まれている。



造化の碑

●透谷の妻

北村透谷の妻の名をミナ（美那・美那子）という。町田の野津田に、慶応元年（一八六五）八月二十九日、石坂家の長女として生まれた。父は石坂昌孝。自由民権運動の闘士。兄弟は三歳下に弟の公歴（まさつぐ）。五歳下に妹登志（とし）の三兄弟だった。

町田市の薬師池の裏手、牡丹園の中に「自由民権の碑 透谷・美那子出会いの地」という碑が立っている。この地で、明治十八年（一八八五）夏、北村透谷と美那子が出会った。透谷十六歳・美那子十九歳だった。美那子は東京下谷にあった日尾塾で和歌、漢字、書道、裁縫など儒教的な教育をうけたが（一時は日尾家の養子になるほど優秀）、一転して横浜のミッションスクール共立女学校（現横浜共立学園）に入りなおす。明治十九年（一八八六）には、キリスト教に入信した。一方、透谷（本

名門太郎)は小田原の没落士族の子。東京専門学校政治学部(現早稲田大学)に学んでいるが、一介の書生に過ぎなかった。

出会いから三年後、明治二十一年(一八八八)十一月三日、熱烈な恋愛の末、東京数寄屋橋の透谷の自宅でキリスト教式の結婚式をあげた。美耶子には東京帝大を出た医者の子嫁があり、家族の反対を押し切つての結婚だったため、石阪家からは一人も出席しない寂しい結婚式だった。結婚後は透谷の両親と同居するが、苦しい生活だった。明治二十四年(一八九一)一粒種の英子(ふさこ)が生まれた。あいかわらず生活は苦しく、芝・麻布の借家を転々とした。この頃の二人の生活は、二人の友人島崎藤村の「春」に描かれている。生来明るい性格の美耶子も、子供を抱えて働けず(美耶子は家庭教師をしていた)焦燥感がつのつたよう、透谷をなじる手紙を送っている。透谷は、東北に伝道旅行に行っていた。

この手紙は現存しないが、透谷からの返事に残っており、「捨てんと欲せば、捨てよ」(離婚しても良い)と、強い調子であった。この年、明治二十六年(一八九三)、ロマン主義を確立したとされる「文学界」が、透谷、藤村らによつて創刊された。この手紙の件があつてから一年後、明治二十七年(一八九四)五月十六日、透谷が首吊り自殺をし、破局を迎えた。透谷二十五歳。日清戦争の二ヶ月前のことだった。透谷絶筆「折れたまゝ、咲いて見せたる百合の花」。墨跡太くとても自殺するようには思えない。結核だったとの説もある。

美耶子は、明治三十二年(一八九九)六月、七歳の英子を透谷の母に預けて、アメリカへ旅立った。美耶子三十三歳、透谷の死後五年のことだった。美耶子の渡米は九年にもおよんだ。オハイオ州ディファイアンスカレッジに学び成績優秀、バチュラー・オブ・アーツ(文学士)の称号を受けた。明治四十年(一九〇七)

に帰国。その十七日前に父昌孝は亡くなっていた。昌孝は衆議員議員となり、群馬県知事まで勤めたが、私財を政治資金に投入し、家も土地も売却、東京の親戚宅でなくなった。地元では、今でも「ショウコウサン・ショウコウサン」と慕われている。

美耶子は帰国後、実母のヤマ、娘の英子を引き取つて生活と格闘しなければならなかった。明治四十二年(一九〇九)、豊島師範学校のただ一人の女性教員(嘱託)になるとともに、自宅に英語塾を開いた。大正十二年(一九二三)、東京府立品川高等女学校の専任教員となり、七十歳となる昭和十二年(一九三七)まで英語教師を勤めた。教え子は次のような感想を書いている。「本場仕込みの発音はすばらしくきれいで、英会話は米人なみだった。澄みきった純な心、宗教信念からか、生一本で、ジヨークもユーモアもなく、授業中ピリツと緊張せざるをえなかった。」という。

大正十二年（一九二三）、関東大震災で自宅が倒壊してからは、娘英子の嫁ぎ先（堀越家）で生活し、昭和十七年（一九四二）七十六歳で亡くなった。太平洋戦争開始から一年後のことだった。

美耶子は幸せだったのだろう。娘英子の家族と晩年撮った写真には、孫が三人写っていた。弟の公歴（まさつぐ）は東京大学の試験に二度失敗。明治十九年（一八八六）渡米。美耶子に先立つ十三年前である。父の死に目には間にあつたが、再度渡米して、再び日本に帰ることはなかった。西部を放浪、マンザナの強制収容所で没した。昭和十九年（一九四四）のことだった。公歴は、コロラド州ボーダーの共同墓地に眠っている。妹の登志は東京麻布の東洋英和女学校から東京音楽学校（現東京芸大）へ進学。バイオリンを専攻し、明治女学校や横浜の小学校の音楽の先生となった。

明治初期、子供たちにこれだけの

教育をした石阪家は没落し、今はない。ちなみに、「自由民権の碑 透谷・美耶子出会いの地」碑前が石坂家であり、裏山には父の石坂昌孝が眠っている。



自由民権の碑



デファインスカレッジ 卒業の頃の美那子顔写真



家族の写真



透谷絶筆と英子を抱く透谷



新婚時代の透谷と美那子

②石仏群

「幻境の碑」がある上川東部会館を右へ曲がり暫く行くと古道に出る。古道を左へ数分行くと農道の脇に、石仏などが安置されている。

舟形如意輪像や石燈籠もあり、なかでも唐破風付の石塔は見事である。塔の三面には、地藏と思われる像が三体彫られている。なぜ三体なのか不明。専門家の話では、もう一つ同じ石塔があれば六地藏になるのだという。



石 仏 群

③金精（勢） 稻荷

金精様には、一m程の「石棒」が奉られている。しかし以前に盗難に遇い根元から折られて、どこに持ち去られたか不明である。

石棒は、縄文中期以降から晩期に作られ、端を瘤状にふくらませた磨製の石棒が多く使われている。

住居跡の一角に立てたものもあり、豊饒を祈る呪術的祭儀に用いたのではないかといわれている。一m以上の石棒は大石棒に分類される。



金 精 様

④熊野山澤泉院圓福寺

上川町二二二二

宗派 真言宗豊山派

本尊 大日如来

寺宝 大般若経残巻

誓女（ごぜ）の巻物

自由民権運動の莊士

秋山國三郎の石碑

開山 智賢法印

開創 貞応元年（一二二二）

鎌倉時代の貞応元年源実朝の菩提を葬るため智賢法印が開山した。古くは鳥栖（とりのす）観音堂の別当寺であった。中興は江戸時代正徳元年（一七一）で、同村熊野権現社の別当を兼ね、御朱印九石七斗を賜る。明治初年、塔中寺の福寿寺、清鏡寺、円秀寺の三ヶ寺を併合し今日に至っている。



秋山國三郎墓

●圓福寺所蔵の大般若経

川口兵庫介幸季が「現世安穩・後生善処」を祈って書写し、鳥栖寺に奉納したものといわれている。写経は、西寺方町大幡の宝生寺で行われ、用紙には、紙谷（大幡の西隣の小名）で作られた和紙が使われたという記録がある。中世文書として貴重なもので、八王子指定有形文化財となっている。一部を郷土資料館で展示している。



大般若経

⑤ 御霊神社

ごれい

祭神 鎌倉権五郎景政

創建は、天正時代である、もと御霊谷戸に祭られ「御霊大明神」といわれた社を、八王子城主北条氏照の家臣近藤出羽守助実により移される。慶安二年（一六四九）に神像を彩色、元禄八年（一六九五）八月二十三日社殿を再建。昭和四十二年（一九六七）に拝殿を新築する。

境内には天満宮、御嶽社の小祠が社殿左右に祀られている。また社前

には綺麗な湧水池がある。この池には「片目うなぎ」が住むという伝説がある。昔、戦のおり敵が放った矢が景政の目に刺さり片目になったと云われ、「御霊うなぎ」ともいう。



御霊神社

⑥ 医王山長楽寺 都

川口町三三五

宗派 真言宗智山派

本尊 不動明王（室町時代）

寺宝 毘沙門天

虚空菩薩（室町時代）

薬師如来（鎌倉時代）

開山 明玄

開創 文治三年（一一八七）頃

秋川街道川口橋を渡り左に折れ、豊かな自然の中に長楽寺がある。文治三年、明玄による開山と伝えられることから鎌倉幕府草創の頃のこと。慶長元年（一五九六）儀海上人がこの寺に於いて経文を書写したと伝えられている。その後、享保年間光盛が中興し、本堂を再建。真言宗布教の拠点でもあったといわれている。当山の鎮守白山社は徳川三代將軍家光公より九石三斗の朱印地を賜り、代々その別当を勤めたとされる。



旧長楽寺

● 薬師如来坐像 都

江戸時代に書かれた新編武蔵国風土記稿には、以下のような記述がある。

「白山社 小名別所に有り、社領九石三斗の御朱印を賜へり、則社地もそのうちなりと云、二間半の社にて、東に向へり、勧進の年代等はずみりかならず。」



薬師如来坐像

別当長楽寺 境内、千八百九十坪、社地のつゞきにあり、新義真言宗、寺方村宝生寺末、医王山薬王院と号す、開山明幻法師文治三年の起立なりと云、本堂七間半に五間半、本尊不動を安置す。

薬師堂 境内の山の麓にあり。三間に三間半、起立の年暦及び本尊の作を伝えず。」

この像は、川口兵庫介幸李が造らせたものといわれ、寄木造で、漆塗りの上に金箔がはりつけられている。全体的に鎌倉時代の写実の様式が取り入れられ、貴重なものである。

⑦ 龍正寺

川口町六六〇

宗派 曹洞宗

本尊 釈迦牟尼仏

寺宝 宗教関係古文書

開山 天永琳達大和尚

(恩方の心源院七世)

開基 雄顛舜碩大和尚

開創 天正五年(一五七七)頃

熊野権現社の別当であり、社殿は江戸期の木造建築である。また境内には、千人同心組頭の小谷田子寅(権左衛門)の墓がある。



本 堂

⑧ 熊野神社

祭神 素戔鳴命

例祭日 四月十五日

龍正寺の南隣りに熊野神社がある。後奈良天皇の時代(一五二六〜一五五七年)頃、熊野那智大社のご分霊



六 地 蔵



小谷田子寅の墓

を遷したという。慶長年間(一五九六〜一六一五)別当寺によつて再建された。当地では、十二社・おくまんと呼ばれている。『新編武蔵風土記稿』に記載のある石灯籠には、文政十年(一八二八)の銘がある。また、入口には「十二社弁天池」があり、池には高丸山(通称)から流れ出す二本の沢が合わさって流れ込んでいる。川口町の古い集落・十二社にあり、中ノ島に弁天さまを祀るところから、弁天池と呼ばれている。池は昔のまま四季折々に静寂で美しい風景を見せてくれる。弁天池の前には「勝軍地蔵」がある。地元の十二社ではこの他に火防(ひぶせ)の仏として、災難除けの信仰や、痛みを伴う病氣にご利益があるという。勝軍地蔵の前の道は「鎌倉古道」といわれているが途中から山道に入るため注意が必要。



勝軍地蔵



熊野神社



鎌倉古道



弁天池

⑨坂本登名蔵家と

キハダの木

川口町（川口橋近く）

登名蔵は、川口村初代村長。明治十六年（一八八三）家督を相続し二代目登名蔵を襲名した。同二十二年（一八八九）前年の市制町村制の公布をうけ、五ヶ村（山入・上川口・下川口・檜原・犬目）が合併して川口村が誕生すると、初代村長に就任。村政にも数々の業績を残している。

秋川街道（当時、五日市往還）の榎木から桜株にかけて、畑の中を曲がりくねっていた道を、将来の輸送、交通量の増大にも対応するとして広く一直線の道（坂本新道）に改修したり、川口小学校や旧役場の敷地を寄付したり、私費を投じて校舎を建てるなど、見識と実行力で明治の川口村を切り拓いた人物である。

その後、同二十七年（一八九四）に府会議員となり、三多摩の東京移

管に反対し、養蚕と機織りを副業とした多摩地域の農家と輸出港横浜との関係を守ろうとした。演説中に倒れた登名蔵、四十九歳の葬儀の参列は、延々竜生寺まで続いたと伝えられている。

坂本家の離れには、太平洋戦争末期の昭和十九年（一九四四）春から市川房枝氏（婦人解放運動家・政治家）が疎開し、四〇五年住んでいたという。屋敷内に都指定天然記念物キハダの木があったが、今は朽ちて無い。



坂本邸と都指定記念物キハダ跡

⑩川口兵庫介館址

川口町

調井台（ととのいだい）の北方、秋川街道の川口中学校入口交差点から南の急坂（案内石碑あり）を上ると「川口兵庫介館跡」があり、坂上に石碑が建っている。

川口氏は、平安時代末期に初代藤原信久がこの地に土着したのがはじまりと伝えられ、二代貞季（さだすえ）は武蔵七党の西党より養子として入ったようである。

吾妻鏡には三代次郎大夫と四代八郎太郎の名が見られ、鎌倉幕府成立に貢献している。以降、川口郷の開発を手掛け、応永年間（一三九四～一四二七）の十一代兵庫介幸季の代に繁栄し、鳥栖寺の再興、長楽寺薬師如来像の寄進、鳥栖寺の大般若経寄進など、社寺造営、写経奉納を積極的に行い、それらを今に残している。



川口兵庫介館址碑

⑪ 鴻之巢山観音院長福寺

川口町二七二二



色川大吉による撰文が刻まれている

宗派 真言宗智山派
本尊 不動明王
寺宝 心経一卷（弘法大師書）
文殊菩薩軸一幅

伊達綱宗公作観音
両祖大師像（鎌倉時代）

開山 勝恵法印
開基 勝恵法印
開創 寛永二年（一六二五）頃
延宝七年（一六七九）に没した頼



長福寺

永法印が中興開山したとも伝えられている。

当時は、裏山にある鳥栖観音堂の別当寺であった。この観音堂はもと御堂山にあり、その後鳥巢、御堂ヶ谷戸など各地を転々とした後、現在地に移転したもので、安置仏は行基作の千手観音である。

本堂に向かい左側には白萩堂があり、本尊「子育観音」と呼ばれる聖観音像が安置され、観音様の裏側に「寛永年間、伊達綱宗公作」と書かれている。

● 鳥栖観音像と鐘の銘

境内に植えられている萩は、仙台から移された宮城野萩で「萩寺」とも呼ばれている。本堂横の白萩堂に安置されている観音像は、仙台伊達家のお家騒動として有名な伊達騒動時の三代目藩主伊達綱宗ゆかりのものといわれている。綱宗が仙台藩江戸屋敷で隠居生活を送ることとなり、当時綱宗が製作した観音像が仙台藩の重臣片倉家に伝わり、同家と遠縁にあたる長福寺住職に譲られたといわれている。

行基の作と伝えられる千手観音像は、はじめ黒沢（現・上川町）の寺院に安置されていたが、ある時、寺院が火災に遭い堂舎は焼けおちてしまったけれども、観音像は火の中から飛び出し東の山中のコウノトリの巢に飛び移っていたとの伝説があり、それを見た村人が新たに祠堂を建てて安置したといわれている。

この後も何度か火災にあいながら、

不思議と難を免れたので、「鳥栖観音」、「火防（ひぶ）せの観音様」と呼ばれるようになったと伝えられている。

堂宇は川口兵庫介が応永年間（一三九四～一四二八）に再建したといわれ、天正十八年（一五九〇）の八王子城落城の折には、その戦火にあり再び焼失した。この時も像は火災を免れ田んぼのほとりで輝いていたと新編武蔵国風土記稿に記される。

このような伝説をもつ「火防せの観音様」は、広く信仰されてきたといわれ、毎年四月十七日に御開帳されている。また新編武蔵国風土記稿には、鐘の銘文が載せられている。（現存していない）

武蔵船方□岡新庄

北河口郷鳥栖寺鳴鐘

元應二庚申年（一二三〇）

十一月廿日

大檀那地頭□信阿

大勸進阿闍梨□賢

鐘の銘にある「信阿（しんあ）」

とは、兵庫介の祖父と考えられている。円福寺所蔵の般若若経にも「願主兵庫介入道与阿（よあ）」とあり、この「信阿」や「入道与阿」という号から川口氏が時宗に帰依していたことがわかる。



鳥栖観音



鳥栖観音堂



鳥栖観音 「新編武蔵風土記稿」より

⑫ 河口山宝池院法蓮寺

川口町二四七二

宗派 時宗

本尊 阿弥陀如来（阿弥陀三尊）

寺宝 遊行二祖他阿真教上人像

南北朝時代の作、時宗文化財

開山 遊行二祖他阿真教上人

開創 嘉元二年（一三〇四）

三世より歴住が判明している。河口氏の外護であり川口道場ともいう。

この寺は度々火災に遭い、天正年間に武田氏の松姫が仮に住んでいた。

天正十九年（一五九一）十一月に朱印十石を賜る。平成十年（一九九八）に現在の本堂・客間が完成（木造）した。この寺には二つの石碑がある。

・原君子剛の墓碑

明治二十五年（一八九二）建立。

千人同心組頭原子剛の顕彰碑。

上野御霊屋御響護八王子方に参加。

上野戦争の時、多賀邸で戦死。

題額・勝安芳、撰文・日野

義順（元千人同心、自由党员）

・楠正重の碑

大正六年（一九一七）

・楠八十寿歳の碑

千人同心天然理心流免許皆伝

長州征伐に参加。上野戦争の時、

麻布祥雲寺に拠る。維新後、静岡に行き、帰郷後、道場を開き

近村の青年を指導。



法蓮寺全景

● 阿弥陀如来立像の

胎内墨書銘

昭和五十五年（一九八〇）、本堂内陣の解体修理に伴い、阿弥陀如来立像の解体修理が行われ、像の胎内から墨書銘が発見された。

背面には、「永正八年（一五一二）甲州都留郡の仏師により修理された」という記載がある。腹部には、「（河口）はやとが願主となつて仏像を修理した」ことが記されている。「永徳二年（一三八二）」という年号が示す事柄については、よく判っていない。

南北朝時代に、川口兵庫介の一族と思われる「はやと」がこうした造寺・造仏を行う等、川口氏の活動の一端を窺うことができる。

原子剛の墓



左：胎内腹部墨書
右：胎内背面墨書



楠家の墓



原子剛墓碑銘

⑬ 旧秋山國三郎家

川口町調井（ととのい）の米山家が秋山國三郎の旧宅である。米山家では、明治の初めに秋山家から購入し移築したという。

秋山家は以前には千人同心を努めており、國三郎の祖父勝五郎の名が、嘉永七年（一八五四）作成の「千人同心姓名在所図表」にみえる。

國三郎は、輸出用の茶を栽培し蚕の山飼いや養蜂など、新しい試みを



楠正重墓碑

したことが伝えられている。旅籠を
経営し、小商いもしていた。土地所
有高は明治九年（一八七六）に約一
町九反、明治十三年（一八八〇）に
約二町三反で、この年と思われる地
租金は七円九十七銭三厘であった。



秋山國三郎家跡



秋山國三郎の家

⑭河井宗兵衛頌徳碑

川口町

篤農家の宗兵衛は嘉永六年（一八五三）川口に生まれ、幼名は浜造、父宗兵衛（初代）の死後、宗兵衛を名乗る。

明治から昭和初期の常食は麦がほとんどであったが、大麦の一品種である裸麦の品種改良を重ね、耐寒・耐病性に強く、収穫も多く、その上味も良い優れた品種「宗兵衛裸」を作り上げた。この宗兵衛裸は奨励品種に採用され地元をはじめ、広く普及している。

一方、宗兵衛は、こうした新しい農業技術を独占することなく、学校を卒業した農家の少年たちを伝習生として預かって、その普及に熱心であった。こうした功績に遺徳を称え、昭和二十七年（一九五二）八王子の有志によって碑が建立された。



河井宗兵衛碑



河井宗兵衛生家

◎参考資料

- ・明治の農民運動 新井勝紘著
- ・増補町田の歴史をたどる 江刺昭子著
- ・明治の町田の女 石坂美耶子著
- ・増補町田の歴史をたどる 町田地方史研究会編
- ・町田歴史人物事典
- ・新編武蔵風土記稿
- ・大日本地名辞典
- ・倭名類聚抄
- ・八王子寺院めぐり 八王子仏教協会青年部
- ・歴史と浪漫の散歩道
- ・八王子歴史と文化
- ・八王子の文学者北村透谷
- ・幕末激動期に殉じた原子剛 野口正久著
- ・八王子事典
- ・八王子市史
- ・八王子地名考
- ・やまゆり
- ・歴史探訪は作家の横顔
- ・武蔵名勝図会
- ・インターネット各ページ
- ・「川口」の地名を考える 沼 謙吉著
- ・八王子発見路地散策案内 中島善弥著
- ・町田市立自由民権資料館 中島善弥著
- ・町田地方史研究会編
- ・昭文社
- ・八王子市地図
- ・八王子市観光マップ
- ・八王子市郷土資料館資料

メモ